

兵庫県産蝶類目録 (3)

山本 広一・吉阪 道雄

VI テングチヨウ科 LIBYTHEIDAE

県下各所に見られ、ことに山間部には少なくない。早春の日だまりに舞い出るものは前年生れの越冬者である。

発生は年1回、出現期の6月半ば頃には、夥しい個体を見ることがある。かつて、栗の開花する頃、佐用郡久崎の地にこうした大きな集りを見つけたが、花の蜜に集るもの、また、あたりの下草や枯枝に憩うものなど数しれず、打ちふるネットに飛びたつ光景は実にすばらしいものであつた。

幼虫はエノキを食樹とし、これに緑と褐色の二つの型が認められる。

- 1♂ 2/VI, 1951 神戸市六甲山 coll., poss. M. Y.
 1♂ 14/VI, 1936 佐用郡久崎町 coll., poss. H. Y.
 1♀ 26/V, 1948 神戸市御影町 coll., poss. M. Y.
 1♀ 12/VI, 1935 飾磨郡雪彦山 coll., poss. H. Y.

VII マダラチヨウ科 DANAIDAE

1. アサギマダラ *Caduga sita nipponica* MOORE

広く山地に分布する。しかし、平地に見かけることもある。筆者らも家屋の密集した加古川市街の中央や、はるかに山をへだてた小野市の田の中で採集した経験がある。

低山地には春秋の二季に多く、年間数回の発生が予想される。蛹態による越冬といわれるが、春、アオバセセリなどとグミの花に得られる個体には、あまりにも汚損の度が著しく、果してこれがこの春の羽化であつたかと疑うばかりのものがある。なお、高地では7~8月に多く、発生は年1回と思われる。

- 1♂ 24/IX, 1932 加東郡五峯山 coll., poss. H. Y.
 1♂ 18/X, 1946 神戸市御影町 coll., poss. M. Y.
 1♀ 2/VI, 1951 神戸市六甲山 coll., poss. M. Y.
 1♀ 29/VII, 1931 養父郡氷ノ山 coll., poss. H. Y.

2. カバマダラ *Danus chrysippus* LINNE.

1957年8月、養父郡西谷小学校昆虫研究班“すみれ会”の児童が、同地の氷ノ山に採集を行つて得たもので、本県では最初の記録である。もつとも本邦にはすでに鹿児島・宮崎・大分・福岡及び佐賀の九州地方をはじめ、高知・大阪・和歌山・長野・新潟・静岡・東京(八丈島)の各府県下に発見されており、かならずしもその例に乏しくはないが、何れも台風などに影響されて、遠く熱帯地域より運ばれて来たものにちがいない。ことに従来の発見地が太平洋斜面に偏していることは、以上の想像を裏書きするに足ると思う。

さて、本県のものについては、当時児童を引率し、指導に当たられた中尾淳三氏が“Natura No. 16, 1959”(県立柏原高校生物研究部機関誌)に次のとおりいつている。

“1957. VII. 2, 午前10時頃だつた。頂上(氷ノ山)のヒュッテの前で採集していた中尾百代・板坂里美の二人が地上に止まつている蝶を発見し、会員全員でさんざん苦勞して、やつと採集してみても本種とわかつた。本種は非常によつていたので、頂上の地面をあちらこちら飛んだが、決して遠くまで飛ぶ力はなかつた。”

1♂ 2/VII, 1957 養父郡氷ノ山

coll. J. Nakao, poss. H. Y.

VIII タテハチヨウ科 NYMPHALIDAE

1. ミドリヒヨウモン

Argynnis paphia geisha HEMMING

広く山地に産し、珍らしいものではないが、平地には稀である。したがつて、東播南部のような地域では殆んど見られず、1931年山本が現在の小野市筋峠に得た1♀が唯一の標本となつている。

発生は年1回、6~7月に出現する。

なお、養父郡鉢伏山・氷上郡粟鹿峯・朝来郡段ヶ峯には中国山脈地帯にのみ見られるという暗緑型の♀が採集される。

- 1♂ 3/VIII, 1954 養父郡鉢伏山 coll., poss. H. Y.
 1♀ 6/VIII, 1931 小野市来住町 coll., poss. H. Y.
 1♀ 9/VIII, 1951 神戸市摩耶山 coll., poss. M. Y.
 1♀ (暗緑型)12/VIII, 1955 養父郡鉢伏山 coll., poss. M. Y.
 1♀ (暗緑型) 8/VIII, 1956 朝来郡段ヶ峯 coll., poss. H. Y.

2. メスグロヒヨウモン

Damora sagana liane FRUHSTORFER

県下各地に広く見られるも、個体数ははなはだ少なく、しばしば、クリの花などに見かける。

発生は年1回、6~7月の頃に出現する。

- 1♂ 16/VI, 1945 小野市来住町 coll., poss. H. Y.
 1♀ 1/VI, 1931 加古川市上荘町 coll., poss. H. Y.
 1♀ 24/VII, 1953 神戸市六甲山 coll., poss. M. Y.

3. クモガタヒヨウモン

Argynnis anadyomene midas BUTLER

山地に多く、ときには平地の雑木林にも見かける。5月中旬頃、他のヒヨウモン類に前がけて現われ、ウツギ

の花などに集まる。それより、秋10月頃まで見かけるが、その間において夏眠するという。しかし、1951年8月15日、炎天下の淡路由良町付近(標高10m以下)に飛翔するの目撃したという例もないではない。(M. D. K ニュース No. 29.)

発生は年1回、

1♂ 22/V, 1955 飾磨郡雪彦山 coll., poss. H. Y.

1♂ 2/VI, 1951 神戸市六甲山 coll., poss. M. Y.

1♀ 8/VI, 1946 印南郡城山 coll., poss. H. Y.

4. ウラギンヒヨウモン

Fabriciana adippe pallescens BUTLER

各地に最も普通な種で、ヒヨドリバナ・アザミ・ウツボグサなどの花に見かける。山地産は平地産に比べて型が小さい。

発生は年1回、6月上旬頃より現われ、一時夏眠を経て、10月頃まで見かける。

本属には、しばしば黒化系の異常型が採集される。1932年6月21日山本が朝来郡葛蒲沢に得たものでは、とくにそうした傾向が著しく、垂外縁紋列の内側は殆んどが黒くなっている。

1♂ 8/VI, 1956 朝来郡段ヶ峯 coll., poss. H. Y.

1♀ 21/VI, 1951 神戸市六甲山 coll., poss. M. Y.

5. オオウラギンヒヨウモン

Fabriciana nerippe FELDER et FELDER

各地に見るも、局地性があり、他のヒヨウモン類に比べて個体の少ないものである。平地に得られるものは山地産より形が大きく、普通河川の堤防などに採集される。

発生は年1回、6~7月、他の近似種に遅れて現われ、夏眠の後、10月頃再び活動を始める。

なお、1932年6月15日、小野市に得た黒化系の異常型♂が山本ものと同にある。

1♂ 11/VI, 1948 川西市東谷町 coll., poss. M. Y.

1♂ 13/VI, 1932 小野市片山町 coll., poss. H. Y.

1♀ 8/VI, 1956 朝来郡段ヶ峯 coll., poss. H. Y.

6. ウラギンスジヒヨウモン

Argyronome laodice japonica MÈNÈTRIÉS

各地に広く、主として山地に産するも、個体数は少なく、おそらくヒヨウモン類中最少のものと思われる。しかも、これは関西一円の現象らしく、多産地として有名な鳥取県大山でさえ、やはりそうした傾向にあるようである。しかし、事情は地域によつてかなりの相異があり、堀田久氏は淡路にあつて最も普通であると述べ、山本も小野市において、決して珍しいものでないと思つている。

年1回、6~7月頃に発生し、他種と同様夏眠の後、9月頃活動を開始する。

1♂ 13/VI, 1953 神戸市山ノ街 coll., poss. M. Y.

1♀ 5/VI, 1931 小野市下来住町 coll., poss. H. Y.

7. オオウラギンスジヒヨウモン

Argyronome ruslana lysippe JANSON

主として山地に多く、ミドリ・ウラギンについて饒産する。しかし、前種同様地域的な消長が著しく、東播地方、ことに小野市付近には殆んど見かけない。

平地産は山地産より一般に形が大きく、色調も濃厚である。

年1回、6~7月の頃に発生し、夏眠を経て10月まで見かける。

・なお、ヒヨウモン類中、ミドリ・メスグロ・オオウラギンスジ・クモガタ・ウラギンスジは森林性が著しく、オオウラギンには草原性があり、そして、ウラギンには、両者に共通の傾向がうかがえる。

1♂ 10/VI, 1953 神戸市山ノ街 coll., poss. M. Y.

1♀ 11/VI, 1955 養父郡鉢伏山 coll., poss. M. Y.

1♀ 6/VI, 1955 神崎郡峯山高原 coll., poss. H. Y.

8. ツマグロヒヨウモン *Argyreus hyperbius* LINNE

各地に産し、海岸地帯より高地にまで見られ、垂直分布の大きい種である。

林中元氏はその著“六甲の草と虫”に東六甲・極楽谷付近より六甲ゴルフ場周辺に多く、マツムシソウやオカトラノオ・ミソハギの花に群がると述べ、高橋寿郎氏も舞子地方に多産すると昆虫世界 vol. 45, No. 1, 1941に記している。しかし、神戸以外の地域にあつては一般に珍しく、例えば東播平地の辺からは採集の数例があるにすぎない。

発生は多化性にとみ、大阪府下には春型(4~5月)・夏型(6~8月)・秋型(8月末~11月)の三つが識別されるが、本県よりは夏型の採集が筆者らの経験にあるだけである。

1♂ 4/VI, 1948 氷上郡粟ヶ峯

coll., Y. Y., poss. H. Y.

1♂ 8/VI, 1946 養父郡氷ノ山北麓

coll., poss. H. Y.

1♀ 2/VI, 1950 神戸市六甲山 coll., poss. M. Y.

9. イチモンジチヨウ

Limenitis camilla japonica MÈNÈTRIÉS

広く各地に見られ、山間溪流のほとりに少なくない。ウツギなどの白花に見かける。

春生は5~6月、夏生は7~9月に現われ、正確な発生回数は詳かでない。

1♂ 6/VI, 1955 朝来郡神子畑 coll., poss. H. Y.

1♀ 2/VI, 1951 神戸市六甲山 coll., poss. M. Y.

10. アサマイチモンジ *Ladoga glorifica* FRUHSTORFER

広く山地に見られるが、垂直分布は低く、個体数も多くない。

春生は前種同様5~6月頃に現われ、両種たがいに混生するが、夏生では幾分おくれ、一致せないようである。年間発生回数は詳かでない。しかし、前種よりは少ないものと思われる。

なお、吉阪は1958年8月29日神戸市六甲山にて、母蝶がスイカズラに産卵するのを目撃したことがある。

1♂ 2/Ⅵ, 1951 神戸市御影町 coll., poss. M. Y.

1♂ 21/Ⅵ, 1952 朝来郡生野町 coll., poss. H. Y.

1♀ 25/Ⅴ, 1956 飾磨郡雪彦山 coll., poss. H. Y.

1♀ 29/Ⅶ, 1951 養父郡氷ノ山 coll., poss. H. Y.

11. コミスジ *Neptis aceris intermedia* W. B. PRYER
各地に最も普通な種で、六甲山系や低山地のハギの多いところに多産する。

春生は4~5月に、また夏生は6~10月に現われ、その発生は複雑である。夏生間に少なくとも2回以上の世代を繰り返すことと思う。

ハギを食草とする。

1♂ 3/Ⅴ, 1959 加東郡滝野町 coll., poss. H. Y.

1♂ 29/Ⅶ, 1954 養父郡氷ノ山 coll., poss. M. Y.

1♀ 2/Ⅵ, 1951 神戸市六甲山 coll., poss. M. Y.

12. ミスジチヨウ

Kalkasia philyra excellens BUTLER

県下には珍らしく、六甲山麓の神戸市・西宮・芦屋・宝塚をはじめ、川西市東谷・宍粟郡の一部・佐用郡久崎・氷上郡柏原及び養父郡大屋などに知られている。しかし、日本海沿岸にも近く発見されるであろうことは、隣接鳥取県側の例に徴して想像に難くない。

発生は年1回、5月下旬に現われ、平地にあつては6月、また山地で7月にまで見うける。

カエデを食樹とする。

1♀ 26/Ⅵ, 1946 神戸市御影町 coll., poss. M. Y.

1♀ 7/Ⅵ, 1957 養父郡大屋町 coll., poss. H. Y.

13. ホシミスジ *Paraneptis pryeri* BUTLER

1902年、すでに姫路市付近より、福田氏によつて認められた本種は、1910年井口宗平氏からも西播佐用の地に報告されている。爾来今日にいたるまで、発生地は次第に追加されてきたが、とりわけ愛蝶家の関心を惹いたのは神戸市須磨の離宮道付近や六甲山麓であろう。今でも多くの個体が採集されている。その他、塚口・芦屋・西宮などにも少なくない。

さて、以上の各地に印南郡城山の発生地を加えると、蝶は瀬戸内に沿つて長く東西に伸びる一帯をなして分布することが知られる。しかし、これらの飛石を埋めるための中間記録が見当たらない。もちろん、調査不備の誤りはあるであろうが、余りにも孤立化した感がするのである。

井口氏は佐用郡久崎町の高倉山の産地について、山の

北側一二箇所に限つて見られると述べているが、山本も城山において、とくに著しい局地的傾向を認めずにはおれない。蝶は決して少ないものではない。しかし、山の中腹より山頂にかけて、東斜面にしか見られず、また周辺の間山からも発見されていない。

なお、県下の産地として、養父郡氷ノ山の山麓がある。1951年東麓の熊次(村)にて1♀が発見され、さらに1959年には南麓側の大屋町にかなりの数が採集されている。

発生は年2回、5月より10月にわたつて見られ、コムスジ以上に群生するのが普通である。また、山間部の発生は年1回が予想され7~8月の候に現われる。

食草は阪神間の低地でユキヤナギが確認され、それが植木とともに広まつたと説をなすものもある。しかし、真偽のほどは明らかでない。

1♂ 10/Ⅵ, 1951 神戸市御影町 coll., poss. M. Y.

1♂ 21/Ⅵ, 1957 養父郡大屋町

coll. J. Nakao. poss. H. Y.

1♀ 17/Ⅵ, 1934 印南郡志方町 coll., poss. H. Y.

1♀ 28/Ⅶ, 1951 養父郡関宮町 coll., poss. H. Y.

14. ウスイロヒヨウモンモドキ

Melitaea diamina regama FRUHSTORFER

かつて西播の地に記録されたコヒヨウモンモドキは、あるいは本種の同定誤りでなかつたかと思われる節がある。それは、現在のところ、コヒヨウモンモドキには近畿以西に確実な記録がなく、また、最近田中蕃氏らによつて佐用郡久崎町長野付近に本種の1♀が採集されたことである。

本種が県下の蝶として登場したのは比較的新しく、1949年、守本陸也氏が氷ノ山に発見し、ついで1952年、西村公夫氏が神崎郡段ヶ峯(現在の朝来郡)に採集して以来のことである。その後、養父郡関宮町に属する鉢伏山や同郡下の大屋町をはじめ、神崎郡峯山高原・佐用郡石井・久崎の両町・宍粟郡千種町にも得られ、広く県中央の山地帯に分布することが明らかとなつた。

1954年、西村公夫氏は加古川・舞鶴の線をもつて本種の分布境界であると報じた。これについてはさらに研究の要もあるであろうが、ともかく、本県以东には未だ発見されない本種が、県下に産することは、最近この生活史が本県産によつて解明されたことともよるこぼしい次第である。

発生は年1回、高地に移るに従つて多少出現はおくれるが、大体6月末より7月にわたり、オミナエシを食草とする。

本県産は鳥取県大山産や島根県三瓶山産に比べて黒味がかつた個体が多く、和名にそぐわぬような憾がある。またこうした個体では翅裏面の亜外縁沿いの銀白紋が白

味を帯びており、特に前記久崎産の1♀にはこうした傾向が著しい。

また、山本が1957年6月30日朝来郡段ヶ峯にて採集したる標本は前翅中室端の黒色斑と、これに連なる紋列が消失し、明るい感じがあり、コヒヨウモンモドキにおける ab. murakumo HARUTA と同一傾向にあるものと思われる。

- 1♂ 10/Ⅶ, 1955 養父郡鉢伏山 coll., poss. M. Y.
1♀ 8/Ⅶ, 1956 朝来郡段ヶ峯 coll., poss. H. Y.
1♀ 5/Ⅶ, 1959 養父郡大屋町
coll. J. N., poss. H. Y.

15. ヒヨウモンモドキ *Melitaea scotosia* BUTLER

現在、養父郡氷ノ山と氷上郡神楽とにのみ知られる珍種である。しかし山本の手にはなお一つ、養父郡大屋町横行のラベルをもつた1♂がある。これは1953年、当時の西谷村（現在大屋町に編入）に在動されていた西谷裕之氏から譲られたもので、西谷氏より横行で採集した由に承つていた標本である。ところがその後、この蝶の氷ノ山での発見者である守本陸也氏より、あるいはそれが西谷氏に贈つたと記憶する自分の採集品ではなからうかとの話があり、また西谷氏もフジミドリなど守本氏の氷ノ山での標本を所載され、山本に譲与下さつているので、偶然起つた間違いと思えば疑念ぬこともない。そのため、一応横行の名を差控えることにしたが、今後発見される可能性もある。何れにせよ、養父郡下の産であることだけは確かである。なお、横行は氷ノ山登山の入口にあたる山麓の部落である。

本種はしばしばウスイロヒヨウモンモドキの発生するような草原地帯に発見され、すでに県下にはその両種が確認されながら、従来あまり知れなかったのは不思議である。たれもがウスイロヒヨウモンモドキに重点を置きすぎたため、幾分早めに発生する本種に気付かなかつたのか、それとも個体が僅少にすぎることなのか、とにかく珍しい存在である。

発生は年1回、6~7月の候に得られる。

- 1♂ /Ⅶ, 1953 養父郡?大屋町 poss. H. Y.

16. サカハチチヨウ

Araschnia burejana strigosa BUTLER

山地に広く、溪流の付近に饒産する。

発生は年3回と考えられるが、筆者らは不幸にしてまだ晩夏より秋生への個体を得ていない。高地では、ときに夏生に混じて春型の残存個体が採集される。

1940年5月16日、山本が宍粟郡三方より得た個体の中には、春型の黒色部が著しく発達し、後翅を横切る巾1ミリ前後の狭い黄土色帯が褪色(?)してほとんど白くなり、夏型を思わせるいわば中間型のものもある。

- 1♀ 20/Ⅵ, 1958 飾磨郡雪彦山 coll., poss. H. Y.

- 1♀ 16/Ⅴ, 1940 宍粟郡三方町 coll., poss. H. Y.
f. ae

- 1♂ 20/Ⅶ, 1955 佐用郡久崎町 coll., poss. M. Y.

- 1♂ 11/Ⅷ, 1955 宍粟郡千種町 coll., poss. H. Y.

17. キタテハ *Polygonia c-aureum* LINNE

各地に分布するも、その数は多くない。

蝶の出現は6~11月、その間、夏と秋の二型があるが、確かな発生回数は詳かでない。

カナムグラを食草とする。

- f. ae 1♂ 15/Ⅵ, 1934 小野市市場町 coll., poss. H. Y.

- 1♂ 16/Ⅷ, 1945 朝子郡神子畑 coll., poss. H. Y.

- 1♀ 16/Ⅷ, 1951 神戸市御影町 coll., poss. M. Y.

- f. au 1♂ 20/Ⅳ, 1958 飾磨郡雪彦山 coll., poss. H. Y.

- 1♂ 2/Ⅺ, 1950 神戸市御影町 coll., poss. M. Y.

- 1♀ 28/Ⅲ, 1931 小野市下米住町
coll., poss. H. Y.

- 1♀ 4/X, 1953 神戸市六甲山 coll., poss. M. Y.

18. シータテハ

Polygonia c-album hamigera BUTLER

古くは田中靖也氏によつて神戸市鳥原貯水池付近より採集された由、高橋寿郎氏の記録がある（昆虫世界 vol. 45, 1941）。その後、1952年7月13日西村公夫氏によつて神崎郡栃原（現在の朝来郡生野町）に2頭の夏型が採集され、ついで1954年吉阪によつて養父郡氷ノ山から発見された。翌年山本もその山麓、熊次よりの登山口において採集したが、この辺には僅かながらも発生し、毎年この地を訪れる人たちによつて採集されている。さらに1956年氷ノ山の南東側の麓、大屋町筏に見つかり、本年は氷上郡下からも採集された。

- f. ae 1♂ /Ⅶ, 1956 養父郡大屋町
coll. J. N., poss. H. Y.

- 1♀ 27/Ⅶ, 1954 養父郡氷ノ山 coll., poss. M. Y.

19. ルリタテハ

Kaniska canace no-japonicum VON STEBOLD

各地に普通な種である。6~11月の間に見られ、夏・秋の二型が識別される。年発生回数はその地の高低によつて、多少の相違があり、平地において3回位かと推察される。吉阪はかつて神戸市御影町において、8月下旬既に第一世代の新鮮な秋型個体が夏型と混じて飛翔せるのを観察したことがある。

また、翅の中には前翅表面の蝶底に小さな青色の円形紋をそなえたものがあり、吉阪もこのような御影産2♂の夏型を所有している。

食草は、サルトリイバラやホトトギス・ユリが確認される。

- f. ae. 1♂ 6/Ⅷ, 1955 朝来郡御子畑 coll., poss. H. Y.

- 1♀ 1/Ⅷ, 1953 神戸市六甲山 coll., poss. M. Y.

f. au 1♂ 17/VII, 1952 神戸市御影町 coll., poss. M. Y.

1♀ 16/IV, 1931 加東郡滝野町 coll., poss. H. Y.

20. ヒオドシチヨウ

Nymphalis xanthomelas japonica STICHEL

各地に広く、発生は年1回、6月頃に現われる。発生直後には夥しい個体の見られることがあり、その幾つかは越冬して翌春再び現われ、高地の日だまりに特有の土地占有の姿態を展開する。

食樹のエノキ、ヤナギについては、はなはだ複雑な問題があり、さらに今後の研究に俟たねばならないが、吉阪が御影町での観察によると、これら両種が共にあるような地域にあつても、夫々に着く別のものがあり、結局は母蝶の食草選択性より、食草上にも二つの系統が起こるのではないかと思われる。

1♂ 25/V, 1950 神戸市御影町 coll., poss. M. Y.

1♂ 14/VI, 1936 佐用郡久崎町 coll., poss. H. Y.

1♀ 10/VI, 1949 神戸市御影町 coll., poss. M. Y.

21. アカタテハ *Vanessa indica* HERBST

広く各地に見られ、珍しいものではないが、発生回数についてはなお詳かでない。おそらく数世代が繰り返えられることであろう。また、多紀郡篠山町における甚田竜太郎氏の観察によれば、晩秋孵化した幼虫のなかには羽化することなく、そのまま死に至る個体も少なくないようである。越冬は成虫態で行う。幼虫はカラムシを食草とし、この葉を袋状に折りまいた中に生活する。かつて吉阪は法西定雄氏とともに川西市東谷地方において、こうした巢の中に共存するらしいコヒラタゴミムシのあることを見出し、大いに興味を深めたことがある。

1♂ 14/VIII, 1954 神戸市御影町 coll., poss. M. Y.

1♀ 7/V, 1950 佐用郡久崎町 coll., poss. H. Y.

22. ヒメアカタテハ *Vanessa cardui* LINNÉ

広く各地に分布するも、個体ははなはだ稀である。山本が東播地方での観察は、衰滅直前の感があり、阪神方面においても珍しい。そして戦時中より戦後にかけて盛んに目撃された事実など、すでに昔の思い出にすぎない。ひつきよう、当時の逼迫した食糧事情が各所に菜園作りを盛んにし、ひいては幼虫に豊富な食草を提供したための偶発の結果であつた。幼虫はヨモギ・ゴボウを食草とする。

年間の発生回数は不明。個体によつて5月末第1化生の現われることがあり、11月頃まで目撃される。

1♂ 10/VI, 1953 神戸市御影町 coll., poss. M. Y.

1♂ 12/VIII, 1932 小野市三和町 coll., poss. H. Y.

23. イシガキチヨウ

Cyrestis thyodamas mabella FRUHSTORFER

北進する南方系蝶類の一つの代表である本種が、県下に得られた記録ははなはだ少なく、1950年中畔史雄氏が

神戸市鷹取山産について、札幌昆虫同好会報に発表したのが最初のものであろう。ついで、1951年、中口公一郎氏によつて摩耶山袖谷に採集された。ここは海拔およそ700mの高所で、山麓で羽化したものが上昇してきたのにちがいない。その後も神戸市滝川学園の校庭で発見され、また、姫路市(?)書写山あたりに得られたらしい話もあつた(不確認)が、採集地はすべて温暖な瀬戸内沿いの地方に限られていた。

ところが、本年(1959年)、意外にも山陰側の養父郡下に発見され、1♂の得られたことは確かに大きなニュースである。標本を山本に贈られた中尾淳三氏は、これについて、西谷小学校六年生の上垣巧君が西谷地区の中間部落で石垣に休んでいたのを捕えたものであること、また、自分の許に届けられた時は完全に死んでいなかったこと、従つて同地において採集したことに疑いの余地がないことを話しておられ、新鮮な個体であることから、おそらく付近の地で羽化したものと想われる。

本県での発生その他については明らかでない。

1♂ 13/VIII, 1959 養父郡大屋町

coll. T. Uegaki, poss. H. Y.

24. スミナガシ

Dichorragia nesimachus nesiotus FRUHSTORFER

山間部に少なくない種であるが、あまり浅山からは知られない。しかし、最近数箇省一郎君によつて、加古川市上荘町に得られた例もあり、ときには平地において見かけることもある。六甲山には多く、県中央の山地帯にも珍しくない。

春型と夏型の二つの型があり、5~6月に現われる個体はむしろ稀である。夏型は7~9月に現われ、さらに後述のゴマダラチヨウやオオムラサキと同様、時には秋生個体を生ずるのでないかと疑われる。

1♂ 27/VIII, 1951 神戸市六甲山 coll., poss. M. Y.

1♂ 1/VI, 1940 佐用郡久崎町 coll. poss. H. Y.

1♀ 12/VIII, 1954 川西市東谷 coll., poss. M. Y.

25. コムラサキ *Apatura ilia substituta* BUTLER

各地に産し、平産地はシダレヤナギを食樹とする。なお、高地産については明らかでないが、やはりこれに類するものかと思われる。

平地産の個体では、♂♀ともに翅の柿色部が発達し、♂は鮮かな紫色光沢を具えている。発生は低地にあつて、年間2回(6~7月、7~9月)若しくは3回、そして高地で1回(7~8月)と想像される。

1♂ 23/VI, 1949 川西市東谷 coll., poss. M. Y.

1♂ 11/VI, 1932 小野市下来住町 coll., poss. H. Y.

1♀ 14/VIII, 1954 神戸市御影町 coll., poss. M. Y.

26. ゴマダラチヨウ

Hestina japonica FELDER et FELDER

各地に普通なるも、高い山地よりはあまり得られない。

エノキを食樹とする。幼虫態で越冬し、それより羽化した春型には白色斑の発達した個体が見られる。やはり、越年中の気温や湿度が影響するのであろう。続いて7~9月頃夏型が現われ、10月頃年によつて若干の秋生を見ることがある。しかし、この世代より生れる幼虫がアカテハの場合と同様、冬を迎えて死滅するか、どうかは明らかでない。

f. v. 1♂ 7/Ⅵ, 1936 小野市市場町 coll., poss. H. Y.
1♀ 17/V, 1948 加古川市北在家
coll., poss. H. Y.

f. ae 1♂ 4/Ⅷ, 1946 養父郡熊次 coll., poss. H. Y.
1♂ 1/Ⅸ, 1944 神戸市御影町 coll., poss. M. Y.
1♀ 1/Ⅷ, 1951 神戸市御影町 coll., poss. M. Y.

27. オオムラサキ

Sasakia charonda charonda HEWITSON

1957年、国蝶と決定し、まもなく切手の図案にデビューした本種であるが、本県における産地は限られ、一般化しない存在である。現在、筆者らの承知する発生地は、多井畑・小部・箕谷・烏原・有馬などの神戸市と、三田・多田(川西市)・六瀬(川辺郡猪名川町)・尼崎・久崎(佐用郡)・筏(養父郡)・鉢伏山麓・篠山それに氷上郡の一部、即ち中央の山地と、これよりのびて大阪との境をつくる地方である。この他にもかつての学生昆虫展に阪急沿線の門戸・中山などの標本があつたようである。

しかし、中でも古くから採集家の注目を浴びたのは、やはり神戸市小部付近であつたと思う。それは、この地が採集の地理的条件に恵まれというだけでなく、かなりの個体が発生していたからであろう。最近の(神戸電鉄)“沿線の自然界”にも、“山の街で下車し、左におれて真直ぐ進むと十分ならず道は狭く、ネザサが生い繁り、……アベマキの相当大きなのが十数本ある。7月ともなれば……オオムラサキが紫色に輝く勇姿を現わし、梢近くを強く高く旋回するのである。阪急地方からこれほど手軽にゆけて、個体数の多いところは他にない。”とあり、また“数分おきに雄大な姿をあらわす。”と説明したのもある。

発生は年1回、7月上旬より現われ、幼虫はエノキを食樹とする。

個体のなかには翅表の小黄色斑がすべて白色化し、肛角部の紅色紋さえ消失した *sugitanii* MATSUMURA も稀には採集できる。

1♂ 1/Ⅷ, 1958 養父郡大屋町 coll. J. N., poss. H. Y.
1♀ 17/Ⅷ, 1957 養父郡大屋町 coll. J. N., poss. H. Y.

Ⅷ ジャノメチヨウ科 SATYRIDAE

1. ヒメウラナミジャノメ *Ypthima argus* BUTLER

県下いたるところ、きわめて普通な種で、春(4~6月)・夏(6~10月)、二つの型が識別される。

発生は、夏型において3~4世代が繰り返えさえ、年間実に5~6回に及ぶものと想像される。(なお、この数は高地に移つて減少する)。

翅表の眼状紋はきわめて変化が多く、とくに春生において著しい。

シバを食草とし、これに産卵する母蝶を目撃したことがある。

1♂ 3/V, 1950 加東郡滝野町 coll., poss. H. Y.
1♂ 26/Ⅵ, 1951 神戸市御影町 coll., poss. M. Y.
1♂ 6/Ⅸ, 1958 小野市下来住町 coll., poss. H. Y.
1♀ 12/Ⅷ, 1942 城崎郡奥佐津 coll., poss. H. Y.

2. ウラナミジャノメ

Ypthima motschulskyi BREMER et GREY

広く県下にわたるも、産地は限定され、個体数の少ないものである。

従来、発生は年1回とされたが、1952年8月22日第2世代目の個体を発見し、南部瀬戸内側の平地では2回の発生が繰り返えされることがわかつた。

なお、この第二世代は8月末より9月初めに現われ、個体は一般に小さく、かつ裏面に暗色に富んでいる。そのため、6月頃に見られる、形の大きく裏面の白みがあつた第一世代とは、かなりの相異が認められる。

食草は明かにしないが、かつてヒメシワで飼育したことがある。

1♂ 8/Ⅵ, 1946 加西郡加西町 coll., poss. H. Y.
1♂ 22/Ⅷ, 1952 神戸市御影町 coll., poss. M. Y.
1♀ 5/Ⅷ, 1946 養父郡鉢伏山 coll., poss. H. Y.
1♀ 13/Ⅷ, 1952 朝来郡柝原 coll., poss. M. Y.

3. ジャノメチヨウ

Minois dryas bipunctatus MOTSCHULSKY

各地に普通な種で、平地では河川の堤防などに多く、山地にあつては高原のスロープなどに饒産する。かつて吉阪は神崎郡峯山高原に、ヒメウラナミジャノメやヒメキマダラヒカゲとともにフジバカマに群がる夥しい個体を目撃し、しばし驚異の感にうたれたことがある。

平地産は高地産に比べて型が大きい。

発生は年1回、7月中旬、多くの♂が現われ、やがて♀が現われる。それより蝶は10月頃まで見られるが、末期には♀のみとなる。

1♂ 29/Ⅷ, 1954 養父郡鉢伏山 coll., poss. M. Y.
1♂ 2/Ⅷ, 1955 小野市市場町 coll., poss. H. Y.
1♀ 26/Ⅷ, 1950 神戸市御影町 coll., poss. M. Y.

4. ヒメキマダラヒカゲ

Harima callipteris callipteris BUTLER

本県産ジャノメチヨウ科中垂直分布の最も高いもので、高地に産し、700mを下らない。もつとも1951年10月7日基田竜太郎氏によつて、多紀郡篠山町釜ヶ嶽山麓標高凡そ300mの所に、破損した1♂が得られたこともあるが、これは秋期に入つて残存した個体が、下降したための異常現象であろう。従つて、採集地点が発生地と大きく距つている。

現在、神崎郡峯山・宍粟郡下の一部並びに水上郡粟ヶ峯・篠ヶ峯、養父郡氷ノ山・鉢伏山、美方郡扇山に知られる。

発生は年2回、6~7月と8~9月の候に現われる。

1♂ 7/VII, 1956 神崎郡峯山高原 coll., poss. H. Y.

1♂ 14/VII, 1952 水上郡神楽 coll., poss. H. Y.

1♀ 28/VII, 1954 養父郡氷ノ山 coll., poss. M. Y.

5. ヒカゲチヨウ *Kirrodessa sicelis* HEWITSON

各地に最も普通な種で、低地に多く、高地にいたれば次の種と交代する。神戸市六甲山における吉阪の観察は、大体200mの標高をもつて両者の境ができるようである。(もつともクロヒカゲがそれ以下に降つて本種と混在する場合もあるが)

発生は5~6月と7~8月の年2回、御影地方では、さらに一世代が繰り返されるように思われる。

食草はジャコタンチク(同定者岡村はた氏)

1♂ 18/VI, 1951 神戸市御影町 coll., poss. M. Y.

1♀ 10/VI, 1958 小野市下来住町 coll., poss. H. Y.

1♀ 29/V, 1951 神戸市御影町(幼虫採集、羽化) coll., poss. M. Y.

6. クロヒカゲ *Lethe diana* BUTLER

山地に多く、その垂直分布の上限は最も高く、県下の最高峯氷ノ山(1510m)の頂にも少なくない。

低地では5月頃より現われ、10月までに数回の発生を行い、高地にあつては6~9月の間に2回の世代を繰り返すものと思われる。

食草はおそらくクマイザサであろう。

1♂ 7/V, 1950 佐用郡久崎町 coll., poss. H. Y.

1♀ 11/IX, 1954 神戸市六甲山 coll., poss. M. Y.

1♀ 3/X, 1955 養父郡鉢伏山 coll., poss. H. Y.

7. キマダラモドキ

Kirinia epaminondas STAEDINGER

1910年早くも井口宗平氏によつて、西播の地に記録された本種は、近畿にあつてはなほ珍しいものである。その後、井口氏はさらにこの蝶について、本誌 vol. 1, No. 4 (1950) に、“長野の滝(註・佐用郡久崎町にある)の下流の池のほとりにだけ見られる”旨を述べられたが、この辺も半世紀を経て、余程変つたのであろう、

現在では多くの愛蝶家から注目されながら、しかも蝶は依然消息を絶つている。

ところが、1942年、山本は久崎の部落より背後にせまる山頂の抜位に出る間道で1♂を採集したことがあり、これを本誌 vol. 2, Nos. 1, 3 (1952~1953) に報告した。しかし、ここもまた新道の開設や樹木の伐採などで、当時と様相が変わり、再度採集の機に恵まれない。これはともに残念きまわる次第だが、この程度の変貌で、種の絶滅が起ろうとは考えられないから、今後も場を改めて発見されるのではないかと想う。あたかも1934年、初めてこの地に発見されたヒロオビミドリシジミが、20年の空白を経て、最近再び採集されだしたと同様、本種も大きな期待を将来に寄せる次第である。

食草その他は明らかでないが、他府県の例からみて、発生は年1回、7月頃に出現するものとする。

1♂ /VII, 1942 佐用郡久崎町 coll., poss. H. Y.

8. キマダラヒカゲ

Neope goschkevitschii MÈNÉTRIÈS

各地に多く、平地に見られる個体は翅色が明るく、南部暖地の春型にはヒヨウモンチヨウを想わせる鮮やかなものがある。これに反し、山間高標地のものは、一般に黒味が強く、裏面もまた暗色化する傾向にある。

発生はかなり複雑であることが想像され、南部及び平地にあつて年間数回を数える。

シヨクタンチクを食草とする。

1♂ 3/V, 1959 加東郡滝野町 coll., poss. H. Y.

1♀ 2/VII, 1951 神戸市御影町 coll., poss. M. Y.

9. ヒメジャノメ

Mycalesis gotama fulginia FRUHSTORFER

各地に多く、分布は次種よりも広く、垂直分布も大きい。1350mの氷ノ山越えて得たのが筆者らのもつ最高記録である。

なお、尼崎市では平地田園の近くに産するといい、また小野市にあつては人家に接した竹藪や笹原にも少なくない。

平地産の♀には、かなり大型なものがある。

発生は年1~2回(高地)乃至3~4回(平地)と考える。

また、夏・秋の二型が識別できる。

1♂ 8/VII, 1953 神戸市摩耶山 coll., poss. M. Y.

1♂ 14/VII, 1955 小野市下来住町 coll., poss. H. Y.

1♀ 13/IX, 1951 神戸市御影町 coll., poss. M. Y.

10. コジャノメ

Mycalesis francisca perdiccas HEWITSON

山地に広く分布するも、あまり高標地からは得られない。

発生は年数回、春・夏二型が識別できる。

f. v. 1♂ 7/V, 1950 佐用郡久崎町 coll., poss. H. Y.

f. ae 1♂ 2/VII, 1951 神戸市御影町 coll., poss. M. Y.

11. ヒメヒカゲ

Coenonympha oedippus annulifer BUTLER

本種もまた本県における記録は古く、福田(駒井)卓氏(1903年)、佐竹正一氏(1906年)、井口宗平氏(1910年)によつて報告されている。そのため、播磨地方の名は本種の産地としてしばしば書物にも現われたが、なほはた特異な分布をなすようである。

六甲山麓については、戸沢信義氏(1929年)を初め最近多くの人たちによつて精査されてきたが、発生地は局限されており、また山頂のもようについては林中元氏が、“六甲山小学校付近、陵雲荘裏のケネザサの叢に見られるも、やはり局地的”であると、その著“六甲の草と虫”(1954年)にいつている。

ところが、小野市にあつては市の南部を中心に、隣接する加古川市北部の上荘町や平荘町・印南郡志方町・加西郡加西町(その他の接続地域は未調査であるが恐らく見うけることであろう)に拡がり、現在伐採された山はだが草原化すると否にかかわらず、きわめて普通である。また、かつては加古川沿いの荒地(小野市付近)にも見られたが、河川改修のため、地を失つて絶滅した。

しかし、ときは川西市東谷のように、1930年頃には多数に発生したといわれながら、その後納得できる自然環境の変化がなく、しかも全く姿を消してしまつた所もある。

その他、神崎郡峯山高原・朝来郡段ヶ峯・氷上県粟ヶ峯及び篠ヶ峯などの湿地草原をはじめ、佐用郡久崎(大日山)などにも知られている。

個体は産地によつて、かなりの変化があり、六甲山麓西宮付近のものは六甲山頂産に比べて型が大きく(六甲産の開張、♂、30~♀35ミリ、ときに40ミリを算し、甲東園産の開張♂35~♀40ミリ)、小野市付近のものには裏面に顕著な白帯を現わすのが少なくない。ことに♀においては著しく、巾2ミリに及ぶものがある。また、地色についても鮮かさに多少の相異が認められるようである。

発生は年1回、一般に♀は♂におくれて現われ、地域によつて相当な開きがある。即ち、六甲山での観察は、♂の最盛期が7月16日、♀にあつて7月25日となつており(M. D. K. No. 28, 1953)、小野市の近傍では6月初旬より10日前後を山として下旬に及んでいる。また、県中央の高標地ではおそく、段ヶ峯には6月下旬より7月上旬に多数の新鮮な個体が得られる。

本種もまた斑紋の個体的変化が著しく、翅表にきわめて明瞭な眼状紋を現わすものがあり、また、1931年6月23日山本が小野市下末住町に得た1♂のように、前後翅とも裏面にある眼状紋が一切の黒色を失つた珍品もある。

(本誌 vol. 3, No. 4 “小野市の蝶を語る” 写真、1958)

1♂ 10/VII, 1957 印南郡城山 coll., poss. H. Y.

1♂ 16/VII, 1949 神戸市六甲山 coll., poss. M. Y.

1♀ 9/VII, 1947 小野市下末住町 coll., poss. H. Y.

1♀ 2/VII, 1955 朝来郡段ヶ峯 coll., poss. M. Y.

12. クロコノマチヨウ

Melanitis phedima oitensis MATSUMURA

クロコノマチヨウ又は本種と同定されるはずのコノマチヨウが県下に採集された例は、必ずしも珍しいことではない。1951年、法西定雄氏によつて、神戸市有馬より1♀が採集されたのをはじめ、岡本・打出の阪神間や宝塚・加古川・溝口あたりにもいられている(記録や私信による)。しかし、これらは何れも記録的なものにすぎなかつた。

ところが、最近養父郡西谷方面に新たな産地が見つかり、山本の知る限りにおいても4♂♂3♀♀が1956~1958年に採集されている。

これについて、中尾淳三氏は *Natura* No. 16, (1956)に、“発生は7~8月(夏型)と9~10月(秋型)の2回で、やや秋型の方が個体数が多いようである。”といつており、常に日蔭を好んで樹間を飛翔するため、筏の社などは好個の採集地となつている。

食草その他については明らかでない。

f. ae. 1♂ 30/VII, 1953 養父郡大屋町

coll. J. N., poss. H. Y.

1♀ 30/VII, 1956 養父郡若杉

coll. I. Y., poss. H. Y.

追 加

アゲハチヨウ科

13. ナガサキアゲハ

Papilio memnon thunbergii STEBOLD

純熱帯系の本種が県下に初めて記録されたのは1952年、当時淡路に在住された堀田久氏によるものであろう。堀田氏によれば、蝶はその前年即ち1951年の8月、淡路志筑町において、同地小学校の島中弘君が自宅のミカン山より得たもので、当時同君はさらに♀らしい1頭を得ていたらしいとのことである。その後、同島よりの消息がなく、恐らく他の暖い地方より飛来していたものと考えられた。ところが、1955年宝塚より、また、1956年には芦屋と西宮より、さらに1958年には加古川市北在家より発見され、昨今本土側の瀬戸沿岸に関心をよんでいる。これは上記の5例がいずれも♀であつたこととともに興味あることで、ことに最近の加古川市での場合は注目し得るものと思う。蝶は市内の名勝地鶴林寺の境内にあるダイダイ樹に産卵中だつたので、卵も同時に採集され、同市高校生数岡省一郎君によつて飼育が試みられた。その結果完全な一組の♂♀が生れたが、一方ダイダイ樹からも当時見残された卵が成育し、完全な1♀が羽(以下46ページへ続く)

(44ページより続く)

化してきた。しかし、この♀は羽化と同時に、絶えず監視を怠らなかつた最初の発見者幹君によつて再び見つけだされ、まもなく捕殺された。そのため、その後の発展経過については知るよしもなく、一応結末を告げたわけであるが、ともかく、野外において一世代を完全に経過した事実だけでも愉快である。

最近蝶の北進といい、環境が生活条件に適しさえすれば、土着することもあり得るのであるから、今後も大い

に注目すべき問題であると思う。

なお、最初の1♀は山本が、また孵化による1♂2♀♀は数岡君が所蔵している。

発生その他については明らかでないが、加古川市の場合、産卵、食樹ともにダイダイ樹であり、県下における採集並びに野外羽化はすべて7~8月に行われている。

1♀ 17/VII, 1958 加古川市北在家

coll. Miki, poss. H. Y.

(未完)